

西大寺の歴史を秘めた溝

西大寺旧境内第25次調査地は、西大寺旧境内の南西部に位置し、『西大寺資財流記帳』から復原される十一面堂院と西南角院の間に推定される場所です。平成21年4月～7月に行われた調査で、寺内を区画していたと見られる奈良時代の東西方向の溝が見つかりました(溝01)。幅約7m、長さ30m以上の溝で、中心部が約2.5～3.7mの幅で一段深くなっています。深さは上段の浅い部分で0.5～0.8m、下段の深い部分でさらに0.9～1.5mあります。溝の埋土は、一番底に薄く部分的に灰色粗砂、その上に厚さ0.1～0.4mの木くず層、その上に木くず層と青灰色砂質粘土がブロック状に混ざって堆積しており、溝の一段深い部分を一気に埋め立てている様子が伺えます。



溝01の断面(東から)

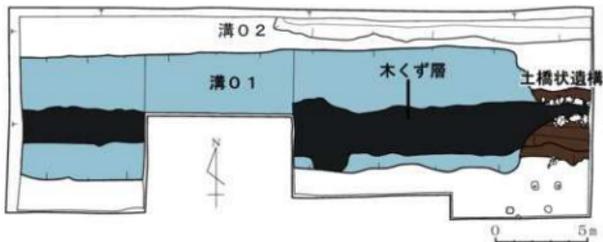
平城京跡(西大寺旧境内) 奈良市西大寺新田町

木くず層と、その上の木くず層を埋め立てた土からは、8世紀後半の土器、瓦類、木製品、イスラム陶器、木簡などが出土しています。溝の最上層に堆積する土からは、8世紀末から10世紀初の遺物が出土しており、溝がその時期以降に埋没したことが分かります。

そのほかに発掘区の北端で幅0.7m以上、深さ0.5m、長さ17m以上の東西方向の溝を1条(溝02)、発掘区の東端で石組みの溝と土橋状の遺構を検出しました。土橋状遺構は、溝01の一段深い部分を埋め立てた後に石組みの溝を作り、その上に板などをかけて渡ったと考えられます。石組みの溝は暗渠だったと思われます。溝02・土橋状遺構からの出土遺物は非常に少量です。



発掘調査地点



発掘区の平面図(1/250)

